



Title	日常の音楽聴取における歌詞の役割についての研究
Author(s)	森, 数馬
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 131-137
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9601">https://doi.org/10.18910/9601</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日常の音楽聴取における歌詞の役割についての研究

森 数馬(大阪大学大学院人間科学研究科)

近年、音楽の社会心理学的研究が比較的盛んに行われている。しかしながら、それらの研究のほとんどは、日常聴取される多くの音楽に含まれている歌詞について十分に考慮していない。本研究は、日常の音楽聴取における歌詞の役割について検討を行った。131名の学生・社会人が質問紙に回答した。質問紙は、歌詞に関する音楽聴取傾向の項目、Juslin & Laukka(2004)を参考にした音楽と感情に関わる項目および Rentfrow & Gosling(2003)のSTOMPによる音楽の好みについての項目から構成された。調査の結果、歌詞は多くの人に重要視されており、その理由は歌詞に感情移入するためであることが示された。また、歌詞は情動を喚起するのに重要な役割を担うこと、聞きやすく軽快な音楽を好んで聴取する人に重要視されていることが示唆された。これらの結果から、音楽聴取において歌詞は欠かすことのできない要素であると考えられた。

キーワード: 音楽聴取、歌詞、感情反応、STOMP

### 問題

音楽は、多くの人の日常生活に根付いている。ただし、どのような音楽が日常に根付いているかはある共同体の社会的・文化的な背景が大きく影響すると考えられる。音楽を社会的な観点から捉える試みは、社会学におけるマックス・ウェーバーの先駆的な著書(Weber, 1921)に端を返し、心理学領域でも古くから行われてきた。その最初の試みは、Farnsworth(1954)の“The Social Psychology of Music”であると考えられる。そのような音楽社会心理学と呼ばれる分野は、欧米で盛んに研究が行われてきた(安達, 1999)。近年では、North & Hargreaves(2008)が“The Social and Applied Psychology of Music”を出版しており、応用心理学にまで視野を広げながら精力的に研究を行っている。

音楽社会心理学は、演奏家のパーソナリティ(Kemp, 1997)や演奏不安(吉江・繁樹, 2007)に関する研究が存在する一方で、聴取者の消費行動(North & Hargreaves, 1997)や聴取者と社会的地位(Tekman & Hortaçsu, 2002)に関する研究なども存在する。このように音楽社会心理学は、演奏家の社会心理学と聴取者の社会心理学に大別されることが考えられる。そのうち、本研究では、聴取者の社会心理学に着目する。

Rentfrow & Gosling(2003)によれば、今までの社会心理学の学術雑誌において音楽聴取に関する論文はほとんど存在していない。しかしながら、彼らの調査は、音楽聴取が日常生活における娯楽の上位に位置することを示した。よって、音楽聴取という活動について調査・解明することは、余暇活動を有意義に過ごすため、well-beingの保持のために有用であると考えられる。North, Hargreaves, & Hargreaves(2004)は、日常的にどのような音楽が、いつ、どこで、どのような目的で聴取されるのかなどについてイギリス居住者に対して調査

を行った。その結果、ポップミュージックが最も頻繁に聴取されること、週末の夜に最も聴取されること、家で最も聴取されること、楽しむために聴取される頻度が最も高いことが示された。この調査は、その後、パキスタン居住者に対しても行われ、交文化的な検討がなされた(Rana & North, 2008)。その結果から、最も頻繁に聴取される音楽はパキスタンの伝統音楽であり、その次に頻繁に聴取されるのがポップミュージックであるなどの違いはあるものの、音楽聴取の傾向はイギリスとパキスタンである程度一致していることが示された。Kreutz, Schubert, & Mitchell(2008)は、音楽聴取のスタイルをE-S理論(Baron-Cohen, Knickmeyer, & Belmonte, 2005)に基づいて共感的(Empathizing)であるか体系的(Systemizing)であるかに分け、それらの聴取スタイルが性や音楽経験によって異なることを示している。これらの研究は、音楽聴取という活動が日常生活においてどのように位置づけられるかをわずかながら明らかにし始めた。

音楽聴取の主要な動機は感情反応であるとされる(Bharucha, Curtis, & Paroo, 2006; Krumhansl, 2002)。近年、音楽聴取と感情反応に関する社会心理学的な観点からの研究が行われている。Juslin & Laukka(2004)は、音楽聴取と感情反応についての探索的な質問紙調査を行い、音楽によって生じやすい情動の種類や、音楽のどのような要素が情動を導き易いかなどを示している。Sloboda & O'Neill(2001)や Juslin, Lijeström, Västfjäll, Barrades, & Silva(2008)の調査では、Experience sampling methodと呼ばれる調査方法が用いられた。これは、日記法研究のような方法で、参加者が日常場面で音楽を聴取したとき、そのつど、情動経験をポータブルマシンに記録させるというものであった。フィールド研究も行われており、Zentner, Grand-

jean, & Scherer(2008) では、まず大学で調査を行い音楽に喚起される情動の種類について因子分析による分類を行った。その後、コンサートの聴取者に対して同様の調査を行った。彼らは、コンサートで得られたデータに対する確証的因子分析を用いて大学の調査で得た因子構造を追試し、コンサート場面と日常場面で喚起される情動が類似することを示唆した。

また、Rentfrow & Gosling(2003)の研究以降、音楽ジャンルとパーソナリティとの関連についての研究もしばしばみられる。Rentfrow & Gosling(2003)は、STOMP(Short Test Of Music Preference)を作成・使用し、音楽の嗜好性に基づいて音楽ジャンルの因子構造を見出した。それらは、以下の4因子であった; “Reflective & Complex”(blues, classical, folk, jazz を含む)、“Intense & Rebellious”(rock, alternative, heavy metal を含む)、“Upbeat & Conventional”(country, sound track, religious, pop を含む)、“Energetic & Rhythmic”(rap/hip-hop, soul/funk, electronic/dance を含む)。彼らの研究ではこれらの因子が Big Five と関連することが示唆されている。その後、さまざまな研究において音楽ジャンルの嗜好性とパーソナリティの関連が再検討されている(Rentfrow & Gosling, 2006; Rentfrow & Gosling, 2007; Zweigenhaft, 2008)。また、音楽に感情反応を求めて聴取しているかや、BGMとして聴取しているかといった音楽の使用の仕方とパーソナリティについて調査した研究(Chamorro-Premuzic & Furnham, 2007; Chamorro-Premuzic, Swami, Furnham, & Maakip, 2009)が行われている。

このように音楽社会心理学の研究は近年盛んに行われてきている。しかしながら、さまざまな文化で日常聴取される音楽の多くに言葉が含まれている(Clarke, 1952)とされる。それにも関わらず、音楽聴取における歌詞の役割については十分に検討されていない。ヘビーメタルなどの特定の音楽ジャンルの歌詞と暴力行動に関する研究は数多くなされてきたが(Anderson, Carnagey, & Eubanks, 2003; Hansen & Hansen, 1990; Ballard & Coates, 1995)、音楽聴取において歌詞がどのような役割を果たしているかは明らかにされていない。そこで本研究では、日常の音楽聴取において歌詞がどのように捉えられているか、また、どのような役割を果たしているかを探索的に検討する。その際、音楽聴取の主要な動機であると考えられる音楽への感情反応がどのように歌詞の役割と関連しているかに着目する。また、歌詞の役割は音楽ジャンルによって大きく異なると考えられる(Rentfrow & Gosling, 2003)。音楽ジャンルの嗜好性がどのように歌詞の聴取傾向と関連しているかに着目する。

## 方法

### 調査対象者

関西圏に居住する学生および社会人 148 名に質問紙を配布した。そのうち自由記述以外に記入漏れがない回答を得られた 131 名(男性 42 名、女性 89 名)のデータについて分析を行った。年齢は、18 26 歳( $M = 19.92$ ,  $SD = 1.50$ )であった。

### 質問項目

音楽聴取と歌詞 音楽聴取において歌詞をどの程度重要と考えているか単極 7 件法(0: まったく重要でない ~ 6: とても重要である)で質問した。この質問に対し 3 以上を回答した参加者には、さらにどのような理由により歌詞を重要と考えるか自由記述で質問した。印象に残っている歌詞のフレーズについて 1 人につき 1 文で記述するよう求めた。また、音楽聴取時に声質に注目する程度と歌詞の意味に注目する程度をそれぞれ単極 4 件法(1: 注目しない、2: やや注目する、3: 注目する、4: 非常に注目する)で質問した。歌詞のある曲と器楽演奏のみの曲を聴取する比率、外国語詞の曲と日本語詞の曲を聴取する比率をパーセンテージで質問した。音楽経験年数も質問した。

音楽聴取と感情反応 音楽のもたらず感情反応は、音楽に情動を認知する反応(e.g. 音楽を聴取して、その音楽が楽しそうであると感じる)と、音楽に実際に情動を喚起される反応(e.g. 音楽を聴取して、その音楽によって楽しくなる)の 2 通りがある(Cook & Dibben, 2001)。研究間で呼び方は異なるが、本研究では前者を印象、後者を情動と呼ぶ。音楽に情動を認知する(以下、印象)頻度および音楽に情動を喚起される(以下、情動)頻度を単極 4 件法(1: 感じない、2: たまに感じる、3: しばしば感じる、4: 常に感じる)で質問した。2 以上を回答した参加者には、印象と情動のそれぞれに対して“演奏音”、“聴取時の気分”(以下、気分)、“記憶や経験”(以下、記憶)、“歌詞”がどの程度関連するか単極 4 件法(1: 関連しない、2: やや関連する、3: 関連する、4: 非常に関連する)で質問した。これらの項目は、Juslin & Laukka(2004)が行った調査において音楽が感情反応をもたらず理由の上位 4 つに挙げられていた項目を参考に選出した。

音楽ジャンルの嗜好性 Rentfrow & Gosling(2003)による STOMP を一部改編して用いた。STOMP を構成する 14 項目であるクラシック、ジャズ、ブルース、フォーク、オルタナティブ、ロック、ヘビーメタル、カントリー、ポップ、ゴスペル、サウンドトラック、ラップ/ヒップホップ、ソウル/ファンク、エレクトロニカ/ダンスの音楽ジャンルのそれぞれについて両極 7 件法(1: 非常に嫌い、4: どちらでもない、7: 非常に好き)で回答を求めた。また、“聞か

ない”かどうか回答を求めた。ここで、“聞かない”かどうか回答を求めたのは、これらの音楽ジャンルが日本人に馴染みの薄いジャンルを多く含んでいると考えられたためである。なお、Rentfrow & Gosling(2003)で‘religious’とされていた音楽ジャンルは、宗教音楽を指すと推察された。‘religious’は、日本人に馴染み深い宗教音楽の呼称であろうゴスペルとした。

手続き

関西圏の大学および大阪府内の大学以外の場所で個別に質問紙を配布し、回答を依頼した。また、関西圏の大学の授業で質問紙を配布し、回答を依頼した。大学の授業での配布時に質問紙に回答できなかった場合は、後に指定した教室に持参させた。

結果

歌詞に関する音楽聴取傾向

歌詞の重要度の平均評定値は、かなり高い値を示した ( $M = 4.40, SD = 1.27$ )。ヒストグラムの歪度は-0.93であり、明らかに分布の頂点は中心の3よりも大きい位置にあった。ここから、音楽聴取の多くにおいて歌詞は強く重視されていると示唆された。ただし、歌詞と述べた場合、回答者が歌を想起して評定を行っている可能性がある。歌には声の音響特性と歌詞の意味が含まれており、回答者がどちらを重要視していたのかはこの結果からは明らかではない。そこで、声質の注目度 ( $M = 3.06, SD = 0.84$ ) および歌詞の意味の注目度 ( $M = 2.95, SD = 0.87$ ) と歌詞の重要度の相関分析を行った。その結果、歌詞の意味のみが有意に正の相関関係を示した ( $r(131) = .54, p < .001$ )。よって、歌詞が重要であるとは、すなわち、歌詞の意味が重要視されていることであると裏付けされた。なお、歌詞の重要度と性の相関係数は有意でなかった ( $r(131) = .12, p = .19$ )。歌詞の重要度と音楽経験との相関係数も有意でなかった ( $r(131) = .07, p = .40$ )。これらから、歌詞が重要であるかどうかは単純に性や音楽経験と正もしくは負の相関関係にあるわけではないと示唆された。歌詞のある音楽と器楽演奏のみの音楽の平均聴取比率は、80.8: 19.2であった。日本語詞の音楽と外国語詞の音楽の平均聴取比率は、71.2: 28.8であった。よって、音楽聴取の多くは、明らかに歌詞のある音楽であり、また日本語であると示された。

歌詞のフレーズおよび歌詞を重視する理由

音楽聴取における歌詞の重要度が3以上であると回答した参加者には、歌詞を重要視する理由および印象に残っている歌詞のフレーズを自由記述で回答させていた。得られた自由記述は、印象に残っている歌詞のフレーズが  $N = 86$ 、歌詞を重要視する理由が  $N = 111$  であった。これらの記述について、Windows 版

MeCab0.97 を用いた形態素解析を行った。語の定義は、MeCab0.97 のデフォルトの辞書定義に則った。形態素解析によって得られた語のうち、出現頻度が2以上の語を分析対象とした。まず、句読点や助詞、または1語では意味をなさないと考えられた語(ex.“こと”、“もの”) および1人の記述文の中で重複して用いられていた語を削除した。次に、同様の意味で使用されていると考えられた複数の語を1つの語とみなしてまとめ、形態素解析で得られた語の上位5つまでの頻出語を選出した(Table1)。Table1 から印象に残っている歌詞のフレーズでは、明確に“僕/私/自分/俺/I”もしくは“君/あなた/you”の出現頻度が大きい。カイ二乗検定の結果、他の語よりもこれらの語の出現頻度が有意に高かった ( $\chi^2(4, N = 65) = 34.00, p < .001$ )。ここから、音楽聴取において歌詞は、1人称もしくは2人称について歌っている内容がよく聞かれており印象に残っていると考えられる。歌詞を重要視する理由には、さまざまな語が高い頻度で挙げられており、出現頻度に有意差は見られなかった ( $\chi^2(4, N = 122) = 1.85, p = .76$ )。そこで、形態素解析により抽出した語について、出現頻度が5以上という基準を設け、歌詞という語を起点とした bigram の共起ネットワークマップを作成した(Figure 1)。このマップから、歌詞の内容が自分の気持ちや心情と重ねられるかが理由として挙げられていた

Table1 自由記述回答における名詞出現頻度

フレーズ	頻度(%)	理由	頻度(%)
僕/私/自分/俺/I	25(29.1)	自分	28(25.2)
君/あなた/you	24(27.9)	意味/内容	27(24.3)
誰	6(7.0)	曲	25(22.5)
前	5(5.8)	気持ち/心情	22(19.8)
愛/恋	5(5.8)	好き	20(18.0)

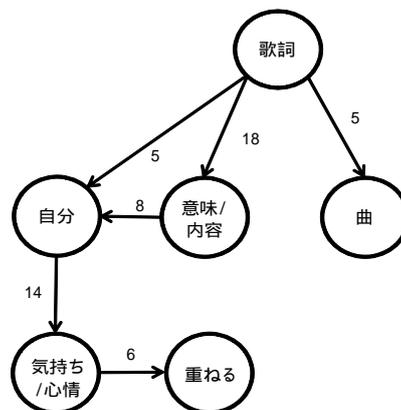


Figure1 共起ネットワークマップ(数字は共起頻度を、矢印の向きは係り受けの方向を示す)

と考えられる。これらは「歌詞に感情移入するため」と捉えられるだろう。また、歌詞の内容や意味が重要視する理由として挙げられていたと考えられる。これらは「歌詞の意味内容を知るため」と捉えられるだろう。

音楽のもたらす感情反応と歌詞

音楽のもたらす 2 種類の感情反応への関連要因の影響の強さを検討するため、2(感情反応: 印象, 情動) × 4(関連要因: 演奏音, 気分, 記憶, 歌詞)の参加者内 2 要因分散分析を行った(Figure 2)。自由度の修正には Green-house-Geisser の修正を用いた。なお、音楽に印象も情動もまったく感じないと評定した 2 名を検討から除外した。分散分析の結果、交互作用が有意であった ( $F(2.81, 359.6) = 5.78, p < .001$ )。下位検定として単純主効果検定を行ったところ、感情反応では、気分と記憶に関してのみ情動の評定値が印象の評定値よりも有意に高かった(それぞれ、 $F_s(1, 128) = 22.17, 3.95, ps < .05$ )。よって、気分や記憶といった要素は、印象よりも情動を喚起するのに強く関連するが、歌詞は印象にも情動にも同等に影響を及ぼすと考えられた。関連要因では、情動のみで単純主効果が有意であった ( $F(3, 126) = 7.17, p < .001$ )。Bonferroni の多重比較の結果、気分と記憶、歌詞の評定値が演奏音の評定値よりも有意に高かった ( $p < .04$ )。ここから、歌詞は、情動の喚起のみに演奏音よりも強く関連し、気分や記憶と同等の影響を及ぼすと考えられた。これらの結果から、歌詞は印象よりも情動に対して相対的に強く影響を及ぼすと示唆された。

音楽が感情反応をもたらす頻度に各関連要素がどの程度影響を及ぼしているか検討するため、演奏音、気分、記憶、歌詞を説明変数、印象の頻度 ( $M = 2.98, SD = 0.78$ ) もしくは情動の頻度 ( $M = 2.86, SD = 0.67$ ) を従属変数とした重回帰分析を行った(Table 2)。ステップワイズ法を用いて、検出基準は  $p < .05$  とした。その結果、印象の頻度には、演奏音と記憶のみが正の標準偏回帰

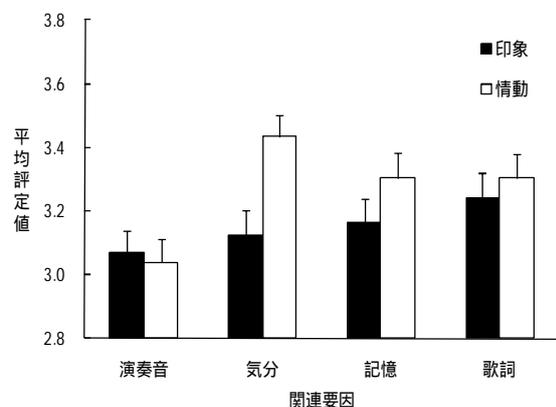


Figure2 感情反応に関連する要因の評定平均値  
注) エラ - バ - は標準誤差を示す。

Table2 感情反応に関する重回帰分析 ( $N = 129$ )

従属変数	感情反応	
	印象	情動
説明変数		
演奏音	.58***	.42***
気分		.26***
記憶	.31***	.26***
歌詞		
$R^2$	.49***	.50***

\*\*\*  $p < .001$

係数を示した。情動の頻度には、演奏音と気分と記憶が正の標準偏回帰係数を示した。よって、音楽が感情反応をもたらす頻度には、歌詞は寄与しにくいと示唆された。歌詞に関する音楽聴取傾向と音楽ジャンルの嗜好性

STOMP の各項目について、評定値の度数と「聞かない」の度数に対してカイ二乗検定を行った。その結果、評定値の度数よりも「聞かない」の度数が上回った項目が 6 項目あった(ブルース、オルタナティブ、ヘビメタ、カントリー、ゴスペル、エレクトロニカ/ダンス)。また、ポップを除いた他の項目でもかなり多くの参加者が「聞かない」と回答していた ( $M = 34.57, SD = 8.28$ )。なお、ポップを「聞かない」と回答した参加者は 1 人もいなかった。これらの結果から、各音楽ジャンルのデータのすべてに対して統計分析を行うのは不適切であると考えられた。そこで、STOMP の各因子に属する項目で、最も「聞かない」と回答される度数が少なかった 4 つのジャンルを選択した。それらは「Reflective & Complex」で、「クラシック」( $N = 99, M = 4.76, SD = 1.30$ )、「Intense & Rebellious」で「ロック」( $N = 111, M = 5.10, SD = 1.30$ )、「Upbeat & Conventional」で「ポップ」( $N = 131, M = 5.92, SD = 1.06$ )、「Energetic & Rhythmic」で「ラップ/ヒップホップ」( $N = 101, M = 4.38, SD = 1.22$ )であった。

STOMP の各因子に属する 4 項目と歌詞に関する音楽聴取傾向である歌詞重要度、声注目度、歌詞のある音楽と器楽音楽の聴取比率、日本語詞と英語詞の聴取比率との相関分析を行った。なお、歌詞注目度については、歌詞重要度との高い相関が得られたため除いた。その結果、歌詞の重要度とクラシックで負の相関関係が ( $r(99) = .24, p < .02$ )、ポップおよびラップ/ヒップホップで正の相関関係が示された(それぞれ  $r(131) = .29, p < .01, r(101) = .24, p < .02$ )。ここから、クラシックを好んで聴取する人は歌詞を重要視しないのに対し、ポップやラップ/ヒップホップを好んで聴取する人は歌詞を重要視すると考えられた。声質の注目度および外国語詞の聴取比率とロックで正の相関関係が見られた(それぞれ、 $r_s(111) = .24, .20, ps < .04$ )。これらから、ロックを好んで聴

取る人は、歌がもつ歌詞の意味よりも声の音響特性に注目しており、外国語詞の作品を多く聴取すると示唆された。これら以外の項目では、有意な相関係数は得られなかった。

### 考察

本研究は、日常の音楽聴取において歌詞がどのような役割を果たしているか、探索的に検討を行った。その際、音楽のみならず感情反応および音楽ジャンルと歌詞の聴取傾向との関連に着目した。

調査の結果、歌詞は多くの人にとって重要視されていることが示された。音楽聴取において歌詞のある音楽、また特に日本語詞の音楽が大半を占めていることも示された。本結果から、日常の音楽聴取において歌詞の存在は欠かせないものであると言える。また従来、音楽聴取に関する心理学的研究の多くは、器楽音楽に対して行われてきた。しかし、本結果から生態学的妥当性の観点に基づいて考えれば、歌詞のある音楽についての研究が重要であると言えるだろう。

歌詞の意味内容については、1人称および2人称についての歌詞がよく聞かれていると示された。歌詞を重視する理由が、歌詞に感情移入するためと考えられたことから、音楽聴取時に歌詞の内容に自己もしくは自己と他者の関係が投影されている可能性がある。しかし、本調査からだけではこの点についての考察は難しく、今後の調査が望まれる。

音楽のみならず感情反応への歌詞の影響は、印象では演奏音や気分、記憶と同等であった。情動では気分や記憶と同等であり、演奏音よりも影響が大きいと示された。歌詞は音楽の印象に対してよりも、音楽が喚起する情動に大きな影響を及ぼすと考えられる。Juslin et al.(2008)のスウェーデンの大学生に対する調査では、音楽に情動を喚起される理由として歌詞はわずかな頻度で挙げられていたのみであった。しかし、本研究では歌詞の情動喚起への重要性が示された。調査方法の違いが結果の違いを生んだとも捉えられるが、調査参加者が属する国の文化の違いが反映されているとも考えられる。音楽聴取において、日本人は特に歌詞を重要視しているのかもしれない。ただし、感情反応が生起する頻度に関しては、歌詞は影響を及ぼしづらいと示された。歌詞は感情反応に対して強い影響を及ぼすものの、感情反応を頻繁にもたらすものではないと考えられる。これは歌詞の意味内容や、その受け取られ方がさまざまであり(Laemmle, 2008)、感情反応を導く歌詞とそうでない歌詞が存在するために生じた結果であるかもしれない。

音楽ジャンルに関しては、好むジャンルごとに歌詞の影響は異なると考えられた。クラシックやロックを好んで

聴取する人には歌詞が重要視されない一方で、ポップやラップ/ヒップホップを好んで聴取する人には歌詞が重要視されると示唆された。これらの結果を各音楽ジャンルが属する STOMP の音楽次元と照らし合わせて考察すると、“Reflective & Complex”や“Intense & Rebellious”に含まれるような複雑な曲展開をもつ音楽や激しい音楽には歌詞が重要視されないが、“Upbeat & Conventional”や“Energetic & Rhythmic”に含まれるような聞きやすく軽快な音楽において歌詞が重要視されることが推察される。ただし本研究では、評定値の欠損のため STOMP の 14 項目のうち 4 項目しか分析対象に用いなかった。STOMP の項目は同じ因子に含まれていても異なる性質をもつことが示されている(Rentfrow & Gosling, 2007; Zweigenhaft, 2008)。また、STOMP に属さない音楽ジャンルについて検討する必要性も述べられている(Zweigenhaft, 2008)。より多くの音楽ジャンルと歌詞に関する検討が望まれる。

以上より、本研究は日常の音楽聴取における歌詞の役割の一端を示した。ただし、本研究の調査参加者は若年者のみであった。年齢の違いによって音楽聴取の傾向が異なるという調査結果(Gabrielsson, 2006)が存在するため、今後はより広い年齢層への調査が必要である。歌詞の聴取傾向とパーソナリティおよび音楽の使用の仕方との関連なども検討の余地があるであろう。さらに、音楽作品の創作者が歌詞にどのような役割を期待して創作を行っているか調査することも重要である。それらを含めたより広範な視点からの調査を行うことで、歌詞のある音楽を聴取することが日常生活にどのように貢献しているか、少しずつ明らかになることに期待する。

### 謝辞

本研究の質問紙作成のご相談に乗っていただいた、大阪大学名誉教授の中村敏枝先生に感謝いたします。質問紙配布にご協力いただいた、大阪大学名誉教授の吉田光雄先生、大阪大学教授の森川和則先生、甲子園大学教授の藤田綾子先生に感謝いたします。

### 引用文献

- 安達真由美 (1999). 音楽における社会心理学的研究の動向 音楽知覚認知研究, 5, 56-59.
- Anderson, C. A., Carnagey, N. L., & Eubanks, J. (2003). Exposure to violent media: The effects of songs with violent lyrics on aggressive thoughts and feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 960-971.
- Ballard, M. E., & Coates, S. (1995). The Immediate effects of homicidal, suicidal, and nonviolent heavy metal and rap songs on the moods of college students. *Youth and Society*, 27, 148-168.
- Baron-Cohen, S., Knickmeyer, R. C., & Belmonte, M. K.

- (2005). Sex differences in the brain: Implications for explaining autism. *Science*, **310**, 819-823.
- Bharucha, J. J., Curtis, M., & Paroo, K. (2006). Varieties of musical experience. *Cognition*, **100**, 131-172.
- Chamorro-Premuzic, T., & Furnham, A. (2007). Personality and music: Can traits explain how people use music in everyday life? *British Journal of Psychology*, **98**, 175-185.
- Chamorro-Premuzic, T., Swami, V., Furnham, A., & Maakip, I. (2009). The Big five personality traits and uses of music: A replication in Malaysia using structural equation modeling. *Journal of Individual Differences*, **30**, 20-27.
- Clarke, H. L. (1952). The basis of musical communication. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, **10**, 242-246.
- Cook, N., & Dibben, N. (2001). Musicological approaches to emotion. In P. N. Juslin & J. A. Sloboda (Eds.), *Music and emotion: Theory and research*. Oxford, England: Oxford University Press. pp.415-429.
- Farnsworth, P. R. (1954). *The Social Psychology of Music*. Ames, Iowa: Iowa State University Press.
- Gabrielsson, A. (2006). Strong experiences elicited by music: What music? In P. Locher, C. Martindale, & L. Dorfman (Eds.), *New directions in aesthetics, creativity, and the psychology of Art*. Amityville, NY: Baywood Publishing Company. pp. 251-267.
- Hansen, C., & Hansen, R. (1990). Rock music videos and antisocial behavior. *Basic and Applied Social Psychology*, **11**, 357-369.
- Juslin, P. N., & Laukka, P. (2004). Expression, perception, and induction of musical emotions: A review and a questionnaire study of everyday listening. *Journal of New Music Research*, **33**, 217-238.
- Juslin, P. N., Lijeström, S., Västfjäll, D., Barrades, G., & Silva, A. (2008). Emotional reaction to music in everyday life: Music, listener, and situation. *Emotion*, **8**, 668-683.
- Kemp, A. E. (1997). Individual differences in musical behavior. In A. C. North & D. J. Hargreaves (Eds.), *The Social Psychology of Music*. New York: Oxford University Press. pp.25-45.
- Kreutz, G., Schubert, E., & Mitchell, L. A. (2008). Cognitive Styles of music Listening. *Music Perception*, **26**, 57-73.
- Krumhansl, C. L. (2002). Music: A link between cognition and emotion. *Current Directions in Psychological Science*, **11**, 45-50.
- Laemmlé, C. (2008). 'Problem music' and subcultures. In A. C. North & D. J. Hargreaves (Eds.), *The Social and Applied Psychology of Music*. New York: Oxford University Press. pp.143-236.
- North, A. C., Hargreaves, D. J., & Hargreaves, J. J. (2004). Uses of music in everyday life. *Music Perception*, **22**, 41-77.
- North, A. C., & Hargreaves, D. J. (2008). *The Social and Applied Psychology of Music*. New York: Oxford University Press.
- North, A. C., Hargreaves, D. J., & McKendrick, J. (1997, November 13). In-store music affects product choice. *Nature*, **390**, 132.
- Rana, S. A., & North, A. C. (2008) The role of music in everyday life among Pakistanis. *Music Perception*, **25**, 59-73.
- Rentfrow, P. J., & Gosling, S. D. (2003). The do re mi's of everyday life: The structure and personality or-relates of music preferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1236-1256.
- Rentfrow, P. J., & Gosling, S. D. (2006). Message in a ballad: The role of music preferences in interpersonal perception. *Psychological Science*, **17**, 236-242.
- Rentfrow, P. J., & Gosling, S. D. (2007). The content and validity of music-genre stereotypes among college students. *Psychology of Music*, **35**, 1-21.
- Sloboda, J. A., & O'Neill, S. A. (2001). Emotions in everyday listening to music. In P. N. Juslin & J. A. Sloboda (Eds.), *Music and emotion: Theory and research*. Oxford, England: Oxford University Press. pp.415-430.
- Tekman, H. G., & Hortaçsu, N. (2002). Music and social identity: Stylistic identification as a response to musical style. *International Journal of Psychology*, **37**, 277-285.
- Weber, M. (1921). *Die rationale und soziologischen Grundlagen der Musik*. Tübingen: Mohr. (ウエーバ - M. 安藤英治・池宮英才・角倉一郎 (訳) (1962). 音楽社会学 創文社)
- 吉江路子・繁樹算男 (2007). 対人不安傾向と完全主義認知が演奏状態不安に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **15**, 335-346.
- Zentner, M. R., Grandjean, D., & Scherer, K. R. (2008). Emotions evoked by the sound of music: Characterization, classification, and measurement. *Emotion*, **8**, 494-521.
- Zweigenhaft, R. L. (2008). A do re mi encore: A closer look at the personality correlates of music preferences. *Journal of Individual Differences*, **29**, 45-55.

## **The function of lyrics on the everyday music listening**

Kazuma MORI(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

In recent years, there has been an upsurge in interest in the social psychology of music. Most studies, however, pay insignificant attention to the function of music with lyrics accounted for the majority of our every day listening. This study, in contrast, focuses on the function of lyrics in everyday music listening. One hundred and thirty one male and female young adults completed a questionnaire. The questionnaire was made up items concerning the manner of music listening about lyrics, music and emotion based on Juslin & Laukka(2004) and music preference by STOMP(Rentfrow & Gosling, 2003). The research revealed that many participants felt that lyrics were very important because they can empathize into the lyrics. Furthermore, the results suggest that lyrics may play an important role in arousing emotion. Those with a preference for upbeat and rhythmic music particularly felt that lyrics were important. These results showed lyric is essential factor in everyday music listening.

Keywords: music listening, lyric, emotional response, STOMP.